

植民地期台湾総督府国語学校における日本人と台湾人校友の役割

——「共治庄政」…草屯地域における渥美寛蔵と洪清江の關係を中心に——

陳 文 松
(閩 立 訳)

はじめに

従来、日本統治期の台湾史研究の多くは、抗日運動中に活動を行っていた台湾総督府国語学校の台湾人校友を研究対象としてきた。⁽¹⁾ 本論文では地域社会にいた日本人と台湾人の校友を研究対象とし、彼らが植民地政府及び地域社会でどのような役割を果たしたか、また、植民地教師という近代化を担った職業は植民地社会にとってどのような意味を持っていたのかという問題を究明したい。

日本統治期の台湾総督府国語学校に関する研究にはかなりの蓄積がある。その中で代表的なものは吳文星の『日據

時期臺灣師範教育之研究』と謝明如の「日治時期臺灣總督府國語學校之研究（一八九五～一九一九）」である。吳文星は師範教育（国語学校時期を含む）が台湾社会の指導層を育成する揺籃であったと指摘している。彼の研究に基づいて謝明如は台湾総督府国語学校の役割や授業内容などの制度上の変遷を研究し、国語学校を「台湾初等教育の旗手で各教育の源である」と位置づけた。⁽²⁾ また台湾教育史との関連では、台湾師範教育における女性教師についての研究が注目されている。たとえば游鑑明『日據時期臺灣的女子教育』と同「日據時期公學校的臺籍女教師」、新井淑子「植民地台湾における高等女学校出身の女教師の実態と意識——ア

表1 渥美寛蔵と洪清江の学歴・経歴一覧表

氏名	学歴・経歴	年代
渥美寛蔵 (1872-?)	国語学校甲種講習科卒	1899
	南投公学校草鞋墩分教場主任	1899-1900
	草鞋墩公学校校長	1900-1912
	草屯庄庄長	1920-1938
	草屯街街長	1939-1940 退職
洪清江 1881-1964	草鞋墩公学校肄業	1899
	国語学校師範部乙科卒業	1906
	草鞋墩公学校訓導	1906
	皮仔寮公学校訓導	1907-1908
	草鞋墩公学校訓導	1909-1915
	草屯墩支庁新庄区區長	1915-1920
	草屯庄助役	1920-1936
	草屯信用購買販売利用組合理事、信用部長	1937-
草屯街協議会員(民選)	1937-	

作成：筆者／出典：『旧植民地人事総覧 台湾編』(日本図書センター、1997年等)。

ンケートとインタビュー調査資料」などである⁽³⁾。さらに、公学校教師であった黄旺成の日記の公開により植民地教師の実態が明らかになると期待される⁽⁴⁾。日本人教師を研究対

象にした弘谷多喜夫は「植民地教育と日本人教師」の中で、植民地教師の育成における日本人と台湾人の差別について指摘し、国語学校における日本人と台湾人校友が地域社会ではたした役割について新たな問題意識を提起した⁽⁵⁾。

以上に挙げた諸先行研究はそれぞれに見るべきものがあるが、それらは主に教育史、学校史、(女性)教師と植民地との関係に焦点を当てたものであった。一方、国語学校の校友(主に男性教師)と地域社会との関連についてはそれほど注目されていない。本論文はこれまでの先行研究に基づいて、植民地統治における教師という職業の位置づけをさらに明らかにし、国語学校における日本人と台湾人校友の役割を考察したい。

研究対象とするのは、日本統治期に草屯地域(旧称北投堡、草鞋墩など、現在の南投県草屯鎮)で活動していた国語学校校友の日本人渥美寛蔵(二八七二?)と台湾人洪清江(一八八一〜一九六四年)⁽⁶⁾である(表1)。統治者と被治者という前提で教師をしていた国語学校の校友は、植民地政策を実施し、植民地社会で教育と教化を行う際、どのような役割を果たしたのか、その相違点はどこにあったのかを探りたい。

渥美寛蔵と洪清江を研究対象にした理由は次の二点である。まず、二人は国語学校の校友という共通点と接点を持っていた、そして、地域社会において二人は特別な関係を持っていたことである。洪清江は草屯四大姓（洪・李・

林・簡）の一つである洪一族の一員という理由で、植民地政府に重用されていた。同じく洪一族の成員であった洪玉麟も清末に北投堡の総理を務め、日本統治初期に保良局長に就任している。彼は地域の人心を安定させ、真つ先に「誠意」を示し、日本軍の進駐に際してほかの郷紳と一緒に日本統治に協力した。また、息子の洪元煌と同族の洪清江ら若い人たちを植民地学校へ入学させて新式教育を受けさせてもいる。洪玉麟の死後、洪元煌は洪一族の長となったが、一九二〇年以後、抗日運動の指導者の一人に転身した。洪清江は公学校から国語学校に進学し一九〇六年に卒業した。⁸その後、草屯地域公学校教師、新庄区長を経て、台湾地方制度改正後の一九二〇年に、草屯庄の助役にまで昇進する。渥美寛蔵庄長（後述）を補佐して、草屯地域における地方行政官僚体制の中で第二位の実力者となった。その後の十余年の官僚人生において草屯地域の運営と安定を保つために、絶えず同族の洪元煌を中心とする抗日運動

と対応していた。彼は渥美寛蔵庄長と洪元煌の間で、「植民政策協力者」と「地域社会保護者」という二つの役割を演じたのである。⁹

渥美寛蔵は宮城県の出身で、一八九九年に国語学校甲種講習科を卒業してから草屯地域に派遣された。¹⁰その後、草屯公学校校長、草屯庄長と街長を務め、植民地統治期間中に草屯地域の「王様」となった。彼は長期にわたって草鞋墩公学校校長を務めていたので、草屯地域の若い世代と師弟関係を持っていた。洪元煌は彼の最初の門下生で、洪清江は同地域における国語学校の最初の校友であった。渥美寛蔵はこうした関係を誇りとしており、「百姓寛蔵」と自称し、台湾人に親近感を示していた。¹¹

では、地域社会における渥美寛蔵と洪清江のつながりやどのように評価すべきであろうか。この問題を解明する前に、まず草屯地域における渥美寛蔵と植民地学校教育および台湾人教師の育成との関係を検討する必要がある。

一 地域社会における日本人教師と

台湾人教師との関係

(1) 国語学校と地域社会における台湾人教師の育成

日本植民地統治の初期に植民地政府は武力で各地の抗日運動を鎮圧しながら台湾の郷紳階級を籠絡し、人的、経済的に協力させた。同時に植民地統治に必要な人材を育成するために、積極的に新式学校教育を行い、郷紳階級の若い世代を入学させた。草屯地域で最初の公学校は草屯四大姓

(洪・李・林・簡)の郷紳(主に洪玉麟・洪聯魁・李昌期・李春盛)の資金で設立されたものである。はじめは草鞋墩公学校と称されたが、のちに草屯公学校と改名された。初代の校長は渥美寛蔵である。植民地政府の要求に従って、郷紳階級の家長は相次いで若い世代を新式学校に入学させた。公学校を卒業したあと優秀な学生には国語学校に入学させ、「新領土の経営者」として植民地の教育と教化を担当する人物に育成した。⁽¹²⁾

国語学校設立の目的は、台湾人の学齡児童を対象とする公学校の教師を育成するところにあった。国語学校の機関誌『校友會雜誌』によると、一九〇五年(日本領有一〇年

目)の時点で台湾人を募集対象とする師範部乙科の卒業生六名、在籍学生一四名、国語部の卒業生一名、在籍学生四名が南投庁(草屯地域を含む)出身だったことがわかる。

そして、一九〇五年の師範部乙科の卒業生は九六名で、国語部は九四名であった。⁽¹³⁾ 師範部乙科設立(一九〇二年)以来、その卒業生の数ははじめて語学部国語科(一八九六年設立)の卒業生の数を超えた。師範部卒業生の人数の増加は、各地の公学校教師を育成することが植民地初期の国語学校の主要な任務であったことを語っている。

前述したように、草屯の郷紳階級と国語学校の日本人校友であり、南投公学校教諭であった渥美寛蔵の協力の下で、一八九九年に南投公学校草鞋墩分教場(翌年独立して草鞋墩公学校となった)が設立された。草鞋墩公学校設立後の三年目、すなわち一九〇二年の卒業生は洪元煌ただ一人であった。学生が少なかったのは、学校設立初期に資金の調達と学生の募集が順調に行われなかったためである。その後、洪清江をはじめ草屯四大姓の子弟が相次いで入学し、行き詰まった局面を打開することができた。そして、草屯四大姓以外の子弟も入学し、次第に四大姓以外の卒業生も現れた。

第二次世界大戦後に出版された草屯国民小学の卒業名簿によると、草鞋墩公学校の第二回卒業生は六名いた。頼金圳・李峰霧・李時敏・黃清海・李峯竹・洪清江（肄業、飛び級で国語学校に進学）である。第三回の卒業生は李金盛・李金浮・李春波・李其力・李春哮・李水棟・林金釵・黃炎成・李峰銳の九名、第四回の卒業生も洪火煉・洪獻奎・張朝・李春塗・洪九・蔡輝・李峰帛・李國・黃平の九名である。第一〇回まで卒業生の人数は一〇名に満たなかった。

許佩賢の研究によると、植民地期の公学校が伝統的な教育から離脱して地域社会に定着できたのは、一九一一年前後であった。⁽¹⁴⁾草鞋墩公学校では一九一〇年代から卒業生の人数が大幅に増加し、第一一回の卒業生は一七名、その後毎年三〇名以上と、順調に伸びていった。⁽¹⁵⁾

ちなみにここで、一九一〇年までの南投庁管内での公学校の設立状況を見てみよう。一八九八年に公学校令の公布施行にしたがって設立された公学校は、南投・埔里・烏牛欄・集集の四か所であった。その後、一八九九年に林圯埔、一九〇〇年に草鞋墩と魚池、一九〇四年に皮仔寮、一九〇五年に内轆（南投分教場）、一九〇六年に社寮（林圯埔分教場）、一九〇七年に濁水（南投分教場）、一九〇九年に土城

（草鞋墩分教場）と姜仔寮（林圯埔分教場）など、各地で相次いで設立されていた。⁽¹⁶⁾

『校友會雜誌』、『旧植民地人事総覧 臺灣編』⁽¹⁷⁾、『臺北師範學校畢業及修了者名簿』⁽¹⁸⁾などの記録によると、草鞋墩公学校から国語学校に進学した学生は以下の通りである。第二回の卒業生は李峰霧⁽¹⁹⁾と洪清江（以上師範部乙科）⁽²⁰⁾、第三回の卒業生は李春哮（国語部）⁽²¹⁾、第四回の卒業生は洪火煉（国語部中退）⁽²²⁾と李春塗（国語部）⁽²³⁾。この中で、李峰霧は李昌期の息子、洪清江は洪獻章の弟、洪火煉は洪聯魁の息子、李春哮と李春塗は李春盛の弟であった。要するに、植民地政府は「尊士」の政策を実施すると同時に、郷紳階級にその子弟を公学校に入学させるように要求したのである。そしてその中から優秀な人材を選んで、従来の科挙制度とは異なる新式学校すなわち国語学校に進学させ、新領土に必要な新式人材を育成しようとした。国語学校を卒業した学生には、教師として元の出身校に派遣され、地域社会の統治や地域住民と子弟の教育と教化に協力することが期待されていた。

(2) 地域社会における台湾人教師の採用と流動

草鞋墩公学校で最初の台湾人教師として採用されたのは一九〇四年に国語学校を卒業した陳寶泉(南投庁出身)であった²⁴。それまでは植民地政府は「学識資望」の郷紳を漢文教師として「雇聘」していた。草鞋墩公学校で「雇聘」されていたのは李昌期と李春盛(国語伝習所卒)である。

その後、草鞋墩公学校の各分教場は相次いで公学校に昇格——草鞋墩(一九二二年に草屯公学校となる)・新庄(一九一六年)・土城(一九一六年)・碧峰(一九二二年)——していくが、これら草屯地域の公学校(ただし一九三八年設立の双冬公学校を除く)で台湾人教師になった人は、ほとんどが草屯四大姓とその親族であった。

洪一族の出身者は、洪清江(新豊、第二回——出身村と草鞋墩公学校卒業順、以下同)・洪江河(茄荖、第一七回)・洪竹興(新庄、新庄公学校第一回)・吳万成(南投街、洪元煌の婿)²⁵であった。李一族の出身者は、李廷魁²⁶・李高崗²⁷・李峰霧(草屯、第二回)・黃洪炎(名間庄、李春盛の婿)²⁸であった。林一族の出身者は林倚宗²⁹・林氏滿(草屯、第一四回)・林有忠(月眉、第一九回)。簡一族の出身者は簡崐崗・簡鵬鳳・簡克輝であった。ほかに吳啓成³⁰・吳浚堂がいる。

こういった台湾人教師は基本的には自らの宗族が属している地域の公学校に就任したが、最初に近隣地域の公学校に派遣されたのちに、草屯地域の公学校へ異動する場合もあった(例えば、南投公学校から草鞋墩公学校への異動)。これには、草屯地域で分教場が相次いで公学校に昇格され、新しい公学校が新設されたことが背景にある。すなわち教師の需要が多くなってきて、人材が草屯地域に戻ってきたのである。

新庄公学校の通学範囲は洪一族が暮らしていた地域のため、この学校の台湾人教師には洪一族の者が最も多かった。洪深坑(洪獻章の養子兼婿、本名は楮深坑)³¹・洪啓明(新庄、新庄公学校第一回)・洪錦源(新庄、第一七回)である。ほかの四大姓出身の教師には林吳氏謹、簡通祥などがいた。

一方、土城公学校の台湾人教師は阮沛³³・曾汝煥・陳成章³⁴・吳啓成・李清水・李百顯³⁵・張氏六蘭・李朝卿(双冬、第一七回)³⁶などであり、そこには洪一族出身の者は一人もいなかった。姓はさまざまであったが、日本統治後期にはいると李一族が多くなった。

前述した草鞋墩街や新庄と同じことが、碧峰公学校にもいえる。ここでの通学範囲は林一族の生活圏であり、台湾

人教師の中でやはり林一族出身の人が最も多かった。すなわち林倚宗・林氏玉露（碧峰、第一八回）・林枝重（碧峰、第一七回）⁽³⁷⁾・林有忠（月眉・第一九回）・林一信⁽³⁸⁾などである。

台湾人教師の異動には、近隣の地域から自分の出身地域へと移り、自分の宗族の生活範囲にある公学校に勤めるというパターンがあった。また、同じ公学校での勤務期間は出身地域と関係がある。一九二〇年に台湾地方制度が改正され、台湾地方自治制度が実施された。草鞋墩公学校に勤めた台湾人教師は一九二〇年を境に、前期と後期に分けられる。前期においては洪清江（新庄、第二回）が最も長く、一九〇六年から一九一五年までの約七年であった（ただし一九〇七―一九〇八年の一年間は近隣地域の皮仔寮公学校に勤めていた）。後期においては吳浚堂が一九二八年から一九三九年まで、女性教師の中では、林氏満（草屯、第二四回）が一九二六年から一九二九年まで勤めていた。

新庄公学校では、洪深坑が一九二一年から一九三一年まで一〇年間勤めていた。勤務年数が一番長いのは洪啓明で、一九二五年から一九三七年まで一三年間教えている。女性教師の林吳氏謹は一九二五年から一九二九年まで五年間勤務していた。

土城公学校では、曾汝煨が一九二四年から一九二八年まで在籍し、李清水と李百顯の勤務期間は一九二九年から一九三三年までであった。吳啓成・陳成章・張氏六蘭は約二年間教えていた。

また、碧峰公学校では、一九二二年に草鞋墩公学校（勤務期間一九一一―一九二二年）から移った林倚宗が、長く勤めていた。そのほかに、林氏玉露、白知母（溪洲、第一五回）・林枝重・林有忠なども勤務年数が長かった。

同じ学校に長く勤められたのは、出身地の公学校で勤務したことによる。つまり家業と職業を兼ねてやっていたのである。植民地統治初期に台湾人学生を募集対象とする師範学校が設立されたのは、現地の人材を利用することが期待されたからであった。実際、台北師範・台中師範・台南師範は主に地元の学生を募集した。その後、三つの師範学校が相次いで廃校になったため、国語学校師範部乙科がその役割を引き継いだ。その際、台湾人卒業生は出身地域の公学校で就職するという原則も継承された。先述した草屯地域の公学校の台湾人教師採用にもその原則が踏襲されたといえよう。

一九二二年に植民地政府は第二次台湾教育令を公布した。

ここに台北、台中、台南の各地域に再び師範学校が設置されることになった。本科・演習科・講習科が設立され、講習科は中等教育の修了者、或いはそれと同等の学歴を有する台湾人（例えば、公学校高等科を卒業した代講教員）を募集対象にした。それによって台湾人教師の地位は国語学校時代より低下した。例えば、洪克紹（草屯地域の郷紳であった洪立方の孫）は一九二七年に新庄公学校の教師心得（代講教員）となり、数年の勤務を経て、一九二二年に新設された台北師範学校公学校教員講習科で修学し、正式に教員資格をとってから改めて新庄公学校の教師として任命されている。⁽³⁹⁾

第二次台湾教育令が実施されてから、師範学校における日本人学生数と台湾人学生数が逆転した。これは、師範学校に日本人教師を育成する傾向が強くなったことを示している。植民地政府は日本人教師を増やすことによって、地域社会の住民および公学校の学生との関係を強め、台湾人を日本人化させる目標を達成しようと考えたのである。⁽⁴⁰⁾

洪火煉の息子で、一九二八年に新庄公学校に入学した洪樵榕は、次のように回想している。当時台湾には台北第一師範学校・台北第二師範学校・台中師範学校・台南師範学

校という四つの師範学校があった。その中で台北第一師範学校は日本人学生のみを募集した。そのほかは毎年三〇名の日本人学生を募集したのに対し、台湾人学生は一〇名しか募集しなかった。師範学校では本科と演習科が設置されていたが、前者は小学校および公学校の卒業生を募集対象とし、就学年数は七年で、卒業後には教師の資格が与えられた。後者は公学校高等科の卒業生を募集対象とし、就学年数は三年で、卒業後准教師の資格しか与えられなかった。⁽⁴¹⁾

台湾教育令が改正される以前、草屯地域の公学校に派遣された台湾人教師のほとんどが国語学校師範部乙科の卒業生であった。例えば、草鞋墩公学校の陳寶泉（一九〇四年）・阮沛・李峰霧・洪清江および新庄公学校の最初の台湾人教師の洪深坑は全員師範部乙科の卒業生であった。しかし、一九二二年に「日本人台湾人（日台）共学」という目標を掲げた第二次台湾教育令が公布されると、その結果として、台湾人教師は全員演習科の卒業生となった。洪樵榕の回想によれば、彼が新庄公学校の三年生であった一九三一年の頃、教師の何武徳（台中大肚）・張慶沛（南投）は台中師範学校演習科の卒業生であった。⁽⁴²⁾

(3) 学縁関係における民族間の亀裂の緩和

では、草屯地域における国語学校台湾人教師と地域社会との関係はどのようなものであったのだろうか。

まず、植民地体制という観点からすれば、台湾人教師は日本人の補佐という役目に甘んじ、これによって公学校内部での民族間の亀裂が生じた。公学校の校長と教諭はすべて日本人校友に独占されており(表2)、台湾人校友はその下で訓導や雇員という仕事をしていた。こういった構図は地方行政の中でも示されていた。地方の街、庄の長はいつも日本人校友から選ばれ、台湾人校友はせいぜいその補佐(助役)に過ぎなかった。もちろん例外もあり、黃洪炎は一九二〇年に中寮庄庄長になっている。しかし、これは極めて稀なケースで、当時、台湾人が抗日運動を起こした主な原因はそこにあった。

このように、植民地体制という観点で見れば台湾人校友は差別されていたが、しかし、地域社会では彼らは指導者の役割を果たした。草屯地域の公学校の台湾人教師は半分以上が四大姓の子弟であった。植民地政府にとって彼らは植民地教育、教化上において「模範」的な存在であるとともに、地域の教育や教化を担当する者でもあり、植民地統

治に欠かせない存在であった。

植民地初期に設立された国語学校は日本人と台湾人を共学させたが、最初から指導者(日本人)と補佐(台湾人)という構図になっていた。とはいえ、同じ日本人でも、渥美寛蔵のように長期生活していた地方官僚(判任官)は植民地政府の中央官僚(高等文官)と異なり、台湾人との学縁という特別な関係を持っていた。それゆえに民族間の亀裂は緩和され、台湾人校友と日本人校友とが協力できたのである。

二 日本人校友の役割―渥美寛蔵の場合―

先述したように渥美寛蔵は草屯地域の公学校校長から、草屯庄長を経て草屯街長となり、長期にわたって草屯地域の地方教育と行政を握っていた。

彼は草屯地域へ赴任した頃から郷紳の洪玉麟(新庄区長)らと協力し、植民地政府の地域を教育、教化する拠点、すなわち草鞋墩公学校を設立した。準備段階で寄付金を出し、そして初代の校長となつて、一九一三年に退職するまで校長を務めていた。彼は草屯地域の国語教育及び地域社会の教化事業に大きな貢献をした。

表 2 植民地時代に草屯地域の歴代公学校校長一覧表

学 校 名	校長氏名	本 籍	就任期間	学 歴
草鞋墩公学校	渥美寛藏	宮城	1899. 4-1912. 3	1899年1月国語学校甲種講習科卒(1899. 4-1900. 3 分教場主任)
	三田村留次郎	広島	1912. 4-1913. 10	1907年国語学校師範部甲科卒
	明石要一	佐賀	1913. 11-1920	1907年国語学校師範部甲科卒
	常田袈裟吉	長野	1921. 6-1937. 3	1914年国語学校公学校師範部甲科卒
	岩下袈裟次郎	鹿児島	1937. 4-1939. 3	1917年国語学校公学校師範部甲科卒
	山口勝利	長崎	1939. 4-1943. 3	日本長崎師範卒
	岩崎惟一	不明	1943. 4-1945. 12	日本熊本師範卒
新庄公学校	元吉伴次	大分	1914. 4-1921. 7	1913年国語学校公学校師範部甲科卒(元来の姓「南」,1914. 4-1920. 3 分教場主任)
	阿部喜久十	福岡	1921. 8-1927. 3	1916年国語学校公学校師範部甲科卒
	小森田頼誠	熊本	1927. 4-1929. 3	1915年国語学校公学校師範部甲科卒
	財津吉隆	宮崎	1929. 4-1930. 8	日本宮崎師範卒
	平田三四郎	香川	1930. 8-1933. 3	教員検定試験合格
	笠野峰松	和歌山	1933. 4-1934. 3	1916年国語学校公学校師範部甲科卒
	大平政光	東京	1934. 4-1937. 3	台北師範演習科卒(年代不明)
	山際茂	新潟	1937. 4-1941. 1	1921年台北師範公学校師範部卒
	岡田寅男	新潟	1941. 1-1943. 3	台北師範公学校師範部演習科卒(年代不明)
	日永新太郎	愛知	1943. 4-1945. 12	日本愛知師範卒

土城公学校	比嘉良庸	沖繩	1909	-1913	1902年国語学校師範部甲科卒(分教場主任)	
	淵野孝之助	長野	1913	-1915	1901年3月国語学校師範部甲種講習科卒(分教場主任)	
	新津重雄	山梨	1916	-1919	1907年国語学校師範部甲科卒(分教場主任)	
	草間益美	長野	1920	-1930. 3	1918年国語学校公学校師範部甲科卒(1920. 1921. 3 分教場主任)	
	大協正臣	鳥取	1930. 4	-1931. 3	1920年台北師範公学校師範部卒	
	平野鹿之助	佐賀	1931. 4	-1934. 3	日本西松浦教員養成所卒	
	松尾仁太郎	佐賀	1934. 3	-1940. 6	教員検定試験合格	
	橋本克己	京都	1940. 6	-1944. 5	台北師範公学校師範部卒(年代不明)	
	宮崎興盛	埼玉	1944. 5	-1945. 12	台北師範公学校師範部演習科卒(年代不明)	
	碧峰公学校	带刀栄人	大分	1922. 4	-1930. 3	1916年国語学校公学校師範部甲科卒
		川畑定規	鹿島	1930. 3	-1932. 5	国語学校公学校師範部(年代不明)
		永池政一	佐賀	1932. 5	-1933. 3	1913年国語学校公学校師範部甲科卒
常吉梧郎		佐賀	1933. 3	-1936. 3	1916年国語学校公学校師範部甲科卒	
笠原石之助		東京	1936. 3	-1941. 3	日本秋田中学卒	
都築午郎		愛知	1941. 3	-1944. 3	台北師範卒(年代不明)	
双冬国民学校	押川吉熊	不明	1944. 3	-1945. 12	日本宮城農林卒	
	陳啓三	彰化	1944. 4	-1945. 12	1918年国語学校公学校師範部乙科卒	

作成：筆者／出典：「草屯鎮誌」620～623頁。

二〇〇〇年に出版された『飛躍百年・薪傳草屯情』草屯國小創校百週年慶特刊』に次のような一節がある。

西元一八九九年、日明治三二年四月二四日、時任南投公學校學務委員的洪玉麟（新庄區長）、李昌期（草鞋墩區長）等人、首倡設置南投公學校草鞋墩分校於下庄敦和宮開課、翌年轉遷頂庄李春盛宅繼續上課、同年洪玉麟、李昌期並募款五百元為基金、至五月五日獲准獨立為草鞋墩公學校、由渥美寬藏擔任首任校長。一九〇一年、渥美校長、李昌期、李春盛、莊瑞慶、洪源卿等人商議、由玉峰社、碧峰社、萃英社所受理之登瀛書院學田三十五甲捐贈給南投庁以為購買學校用地之經費、翌年黃春帆、洪聯魁、洪玉麟等人又籌募四千五十元為新建校舍經費、一九〇三年七月草鞋墩公學校開始動工興建校舍、一九〇四年三月校地建築完成、四月一日新學期開始正式遷入上課。（中略）當時學區範圍、最遠包括雙冬、土城、南埔、頂坎、北勢湍、牛屎崎、番仔田、北投、新庄、林仔頭、溪州、山脚⁽⁴⁾等地。

（西曆一八九九年、日本明治三二年四月二四日、當時南投公學校の學務委員を務めていた洪玉麟（新庄區長）、李昌期（草鞋墩區長）などは南投公學校の草

鞋墩分校を設立し、下庄の敦和宮という寺で授業を開始することを提案した。翌年、学校は頂庄の李春盛の自宅へ移されたが、洪玉麟と李昌期は五〇〇圓を募金し、五月五日に許可を得て草鞋墩公學校は独立できた。初代校長は渥美寬藏であった。一九〇一年に、渥美寬藏、李昌期、李春盛、莊瑞慶、洪源卿などが相談し、玉峰社、碧峰社、萃英社が管理する登瀛書院の學田三十五甲を南投庁に寄付させ、その金で學校の土地を購買することにした。翌年、黃春帆、洪聯魁、洪玉麟などは四〇五〇圓を新しい校舍を建てる費用として調達した。一九〇三年七月から校舍の工事がはじまって、一九〇四年三月に完成した。四月一日、新校舍に移り新學期が開始された。（中略）学区の範圍には双冬、土城、南埔、頂坎、北勢湍、牛屎崎、番仔田、北投、新庄、林仔頭、溪州、山脚などが含まれている。）

草屯地域の最初の植民地近代學校の誕生については、次のようにまとめられよう。（一）學務委員の洪玉麟と李昌期の提案に応じて、草屯地域の洪姓と李姓の郷紳階級が私財と人材を提供するなどの支援を行い、遂に草鞋墩公學校を

表3 草鞋墩公学校に寄付した人名と金額(単位: 銀)

240圓	碧峰社	50圓	李春盛	30圓	林啓書
20圓	洪玉麟	15圓	林一和	15圓	黃春帆
15圓	林天龍	10圓	李昌期	10圓	渥美寛藏
10圓	李蘭芳	10圓	賴秋錦	10圓	洪長隆、洪元載
10圓	李朝王	10圓	李光親	10圓	洪喙
10圓	洪正泰	10圓	謝仲鑿	10圓	洪秀青
10圓	洪立方	10圓	洪記源	10圓	洪洪源
10圓	林瓦郎	10圓	林合記	5圓	洪聯魁

作成: 筆者/ 出典: 南投県草屯鎮草屯国民小学『創立七十週年紀念同學録』1970年。

草鞋墩公学校に改名された。国語学校の日本人校友であった渥美寛藏が初代校長に選ばれ、学校建設のための寄付金を出した(表3)。草鞋墩公学校は草屯地域の最初の近代学校で、植民地政府、地域社会の郷紳、国語学校日本人校友という三者の力で成立した学校であった。

先述したように、草鞋墩公学校は創立してから十数年の間に入学者数が年々増加していった。洪玉麟をはじめ草屯

開設した。地域社会の代表で植民地政府に選ばれた学務委員は、ここで重要な役割を果たしていた。(2)登瀛書院を管理する伝統的な文社は大量の学田を寄付し、それが公学校設立の基金となった。

(3)南投弁務署(後南投庁)の許可を得て、校名は従来の南投公学校草鞋墩分教場から草

地域の四大姓郷紳らは相次いで子弟を公学校に入學させた。優秀な学生は校長の推薦によって当時台湾の最高学府、すなわち国語学校に進学できた。洪清江は渥美寛藏の教育をうけて、のちに彼の協力者となった⁽⁴⁵⁾。

三 台湾人校友の役割—洪清江の場合—

草屯地域で植民地統治を補佐する役割を果たした若い世代の代表は、国語学校の台湾人校友の洪清江であった。

先述したように、草鞋墩公学校の第一回卒業生は洪元煌一人で、第二回以降、洪姓の卒業生が増えてきた。ちなみに第二回の卒業生は六名いたが、その中で洪清江は成績優秀により、公学校の推薦によって飛び級で国語学校師範部に進学できた。卒業後は、長期にわたって母校で教師を勤め、草鞋墩公学校の初代校長であった渥美寛藏に協力しつつ、学校の運営に尽力し、一九一五年に新庄区長に就任した。一九二〇年に渥美寛藏は台湾地方制度改正後の初代草屯庄長に就任したが、彼の推薦で洪清江は草屯庄助役に抜擢され、街庄の行政に携わるようになった。

洪清江の経歴について、一九三四年に出版された『臺灣人士鑑』に次のように書かれている。

(洪清江は——筆者注) 明治十四年五月十九日洪正泰氏

ノ四男トシテ現住地(番子田——筆者注)ニ生ル 明治

三十九年三月臺灣總督府國語學校師範部乙科卒業後

大正四年ニ至ル迄約十年間公學校教師トシテ皮子寮草

屯各校ニ奉職シ専ラ教化ニ心ヲ致セリ 大正四年九月

新庄區長ヲ命セラレ大正九年地方制度改正ト同時ニ草

屯庄助役ニ任セラレテ今日ニ至ル 大正九年六月十四

日臺灣紳章條例ニヨリ紳章ヲ附與セラレ⁽⁴⁶⁾

洪清江の兄であつた洪獻章も紳章を授与されている。洪

獻章は科挙試験に合格した秀才で、いわゆる「旧士」で

あつた。洪清江は近代の新式高等教育を受けていた新青年

で、いわゆる「新士」であつた。兄弟二人とも植民地政府

より紳章を与えられたが、それは、科挙試験を突破し出世

するといふ伝統的な「學歷」認識が植民地統治下において

再解釈され、創新されたことを語っている。

一九〇六年三月に洪清江は国語学校師範部乙科を卒業す

ると同時に、同校校友会の終身会員となり、卒業後、母校

の草鞋墩公学校で教師を勤めた。草屯地域における次世代

の代表であつた張深切(のちに有名な社会運動家兼文学者と

なつた)は、一九二一年頃、洪清江の授業を受けた経験が

ある。⁽⁴⁷⁾

一九一五年九月に、洪清江は洪玉麟と洪聯魁の後をつい

で植民地政府より新庄區長に選ばれた。当時、旧郷紳階級

から區長を選ぶのは普通であつたものの、三四歳の若さで

區長に拔擢されるというのは異例である。洪清江はなぜこ

のように植民地政府に重用されたのか。彼が洪一族であつ

たほかに国語学校卒という學歷を持っていたからである。

區長に就任するやいなや、洪清江は草屯地域の住民に呼

びかけて西暦の新年を祝う運動を行っている。一九一五年

の年末に洪清江は区内の有力者と相談し、伝統的な旧暦の

新年のかわりに太陽暦の新年を祝うことを考えた。その年

はちょうど日本の台湾領有二〇周年にあたる年で、洪清江

らの行動は台湾全島から注目された。台湾唯一の全島紙で、

植民地政府の機関紙でもある『臺灣日日新報』は次のよう

に報道している。

草鞋墩民改奉正朔

南投廳草鞋墩支廳新庄區長洪清江氏(國校師範部卒業

生)。暨同庄埤圳主事洪元煌氏。有力家洪錦水氏。皆

當地新進有為。熱心公益之人也。頃為地方改良計。發

起改奉正朔。即廢陰曆新正。迎陽曆新正。此事一傳。

庄民欣然賛成⁽⁴⁸⁾。

(一) 草鞋墩民は正朔を改める

南投庁草鞋墩支庁新庄区長の洪清江(国語学校師範部卒業生——原注)、同庄埤圳主事の洪元煌、有力者の洪錦水はみな地域の新進有為、公益事業に熱心な者である。最近、地方のために改良をはかる。正朔を奉ずることは彼らの発起である。すなわち、陰暦の正月を廃し、陽暦の正月を迎える。これは広がって、庄民は喜んで賛成する。)

この記事で注目したいところは次の三点である。

まず、発起人の洪清江について、記事の中で彼の「国校(国語学校——筆者注)師範部卒業生」という学歴が強調されている点である。当時、台湾社会では国語学校卒という学歴はまだめづらしかったが、国語学校師範部卒の教師は初級文官(判任官)の資格を持っていた。そこで、彼ら(新附民(台湾人)を教化する使命を担う「新領土経営者」であることを大衆に示唆しようとしたのであろう。

つぎに、記事中で洪清江らは「地域の新進有為、公益事業に熱心な者である」というように評価されている点。植民地政府からみればこのような行動は地域社会の模範であ

り、洪清江のような「新進有為」の青年は地域社会の統治において大いに期待されたのである。

さらに、洪清江が教育を行うほかに、区民の教化を積極的に推進したことを記している点もあげられる。彼が一九二〇年六月に紳章を授与されたのも、植民地政府がその行動を高く評価したからである。一九二一年に台湾文化協会が設立され、台湾青年たちに大きな影響を及ぼしかねない事態となった。そこで、台湾人の自治、台湾人の自覚というその思潮に影響されないよう、一九二二年に渥美寛蔵は草屯地域の通学区域で「官製青年会(団)」を設立している。一九二六年の台湾総督府の調査によると、この時期に草屯地域で設立された官製青年団は次のようであった。

土城青年団・洪周南(一一五人)、国語普及会、図書購

入、道路指導標、模範共同耕作地経営、

団旗作成、風俗改良。大正一一年一〇月

三〇日。

永姓青年団・簡徳生(三四人)、講話会、国語練習会、

副業講習会。大正一一年一〇月。

秀惠青年団・洪支山(三二人)⁽⁵⁰⁾、進善会。大正一三年三

月五日。

溪州青年団…白龍樹(四三人)、家長会、主婦会、婦人会、夜学会、体育会、庭球会、水泳会、音楽会。大正一二年一〇月二日。

新庄青年団…洪深坑(二八人)、国語普及会、指導標講習会。大正一二年三月一日。

ここから、洪一族出身の台湾人教師が草屯地域の官製青年団運動で活躍していることが示される。そして青年団の活動経費は主に庄の補助金から支給されていたこともわかる。⁽⁵¹⁾ 草屯庄助役を務めた洪清江は高く評価されることになった。一九三五年に出版された台中州の名望家を評価する『新中州の展望』では、洪清江について次のように書かれている(傍線の部分は筆者)。

君は草屯庄番子田の人、郡下切つての名望家として市民から絶大の尊敬と支持を受けてゐる。學成りてから君は実社會の人となり其の明快な手腕を忽ちにして世人の認識する所となり早くも草屯助役に拔擢され、庄長の女房役として庄長を輔佐し、財政に、庄治に或ひは産業の発展に獻身的努力を續けられ、同庄が今日の如き発展を見たのも実に君の力に待つ所が多い。今や郡下唯一の寶庫とも云ふべき草屯庄を背負つて立つに

は好固の人物と云ふべきであらう。頭腦明晰で然も社交上手である君なれば、益々其偉大なる抱負を披瀝して必ずや幾多の治績を挙げる事と信ずる。近き將來の庄長として、益々奮闘を續けられん事を切に望むものである。家庭には長息耀勳君東大文科を卒へ臺北帝大助手に在勤し次男耀堂君は醫專卒業後京都醫大に研鑽中、何れも洋々たる前途を囑目されてゐる。草屯庄中家庭教育に成功し子弟の將來進むべき處に能く指導し自他共に許さる、者多しと云へども君の如く圓滿發達した者少きと云ふ。⁽⁵²⁾

この記述から、洪清江は家庭と事業(教師と助役)の両面で順風満帆だったと思われる。彼は草屯地域で模範的な存在であった。

しかし、「將來の庄長」と期待されていた洪清江は結局助役のまま公務員の生涯を終えた。これは植民地政治体制による民族差別とも関係するとともに、洪清江の上司であつた渥美寛蔵の存在が大きかつた。渥美寛蔵は国語学校卒業後、草鞋墩公学校校長、草屯庄長、改正後の街長などを歴任し、植民地統治者として長期にわたつて草屯地域に君臨していた。同時代の人々は洪清江の昇任を期待してい

たにもかかわらず、渥美寛蔵が街・庄長を壟断する状態は変わらなかった。洪清江も大きな支持を得ていたので、草屯地域では渥美寛蔵と洪清江の体制が維持され続けたのであろう。

草屯地域の最初の国語学校の校友である洪清江は、植民地統治の補佐役として、地域社会における台湾人の教育と教化に大きな貢献をしたといえよう。一九三六年に彼は助役の座を離れたが、新設された草屯信用購買販売利用組合の理事を担当することになった。その後、民選草屯街協議会員に当選し、日本の敗戦まで再任されていく。また、皇民化運動中と同じ国語学校出身で同族の洪深坑とともに部落振興会の教化委員にも任命された。いいかえれば、植民地統治期を通じて、洪清江は協力者としての使命を最後まで全うしたのである。

一方で、洪清江が同族の洪元煌の組織した文化運動と社会教育運動に参加したことにも注目する必要がある。⁽⁵⁴⁾しかし、これは渥美寛蔵と洪清江の關係には影響を与えなかった。一九二七年以前、渥美寛蔵は洪元煌など台湾文化協会幹部が草屯で主催した文化活動に参加したこともあり、炎峰青年会の成立大会で祝辞を述べたこともある。

むすびに

—日本人、台湾人校友による地域社会の共治—

オランダ統治下の台湾史研究者は、当該時期における植民者と漢人との關係を「共構殖民」と呼んでいる。⁽⁵⁵⁾日本とオランダの台湾統治の時期および植民地経営の度合いは異なるが、少数の植民者が多数の被植民者を統治する状況は似ている。日本統治期における地域社会の統治者と被治者との關係は、鎮圧と抵抗の關係というより「日本人と台湾人の共治」の關係に近かった。もとより、これは日本植民地統治の本質と実効性を否定しているのではない。植民地統治の構造の中で、地域社会レベルでは日本人と台湾人校友の役割は、統治と被治という二元的な構図を超えていた。「共治關係」の形成過程においては、師弟關係や、地方官僚と草屯地域四大姓との關係など、さまざまな背景が存する。例えば一九三〇年代以後、草屯地域で「李役場、洪農倉」という言い方が流行っていた。「李役場」とは洪清江が退職したあと、李姓（李昌期の家族）の人々が助役と会計役などを後継し、役場を占めていたことを意味する。「洪農倉」とは、洪一族の洪火煉が農業倉庫を創立し経営していたこ

表4 草屯人口比例および職業別戸数一覧表(1936年現在)

	内地人	本島人	外国人	合計
戸数	84	5,033	19	5,136
人口				
男	136	15,457	58	15,652
女	114	15,081	29	15,224
合計	250(0.8%)	30,538(98.9%)	87(0.03%)	30,875(100%)
職業別戸数				
官公吏	111(2.2%)			
農業	3,139(61.1%)			
商業	368(7.2%)			
工業	65(1.3%)			
交通業	98(1.9%)			
自由業	12(0.2%)			
日雇	1,216(23.7%)			
土地収益	85(1.7%)			
その他	49(1%)			
合計	5,138(100%)			

作成：筆者／出典：南投郡草屯庄役場『草屯庄勢一覽』1936年版。

とをいう。一九三〇年代に草屯四大姓の洪と李の二族が植民地統治と親密な関係を持つていたことが示されている。植民者の権力は無限大であったが、草屯庄総人口の〇・八%⁽⁵⁷⁾を占めるに過ぎず、官僚の人数はもつと少なかった(表4)。もし洪清江など四大姓を中心とする若い世代が「共治庄政」に協力してくれなかったら、はたして渥美寛蔵に代表される植民者は有効に地域社会を統治できたであろうか。

地域社会の地方官僚が植民地政府の中央官僚ともつとも違うところは、まず彼らが日本の名門大学出身ではなく、高等文官でもなかったことである。そして、彼らは若いころ台湾に来て地方官僚になり、植民統治下で一生を終え、長年地域官僚を勤めた。彼らの植民地社会に対する思いは、台湾には短期にしか滞在せず、日本政界での出世を目標とした植民地高等官僚とは全く異なる⁽⁵⁸⁾。日本人校友は植民地教育と教化を推進

する任務を担当していたので、暴力を振う植民地の軍隊と警察よりも地域社会に溶け込み、住民の協力を得ていた。もちろん、植民地政府の地方・中央官僚に象徴されていた植民地統治は、依然として植民地社会の住民の批判と政治抵抗の対象でもあった。だとすれば、植民地統治下の地域社会における日本人校友と台湾人校友の役割については、さらに研究の余地があると思われる。本論文で検討した渥美寛蔵と洪清江の関係はその一例であるにすぎない。

(1) 台湾総督府国語学校は一八九六年に設立され、当時植民地台湾の最高学府であった(中等教育機構)。一九一九年に台湾教育令によって台北師範学校と改称された。国語学校は台湾の初等教育(当時台湾籍学童に対して公学校を設置し、日本籍学童に対して小学校を設置した。本論文では公学校を研究対象とする)の教師を育成する学校であった。しかし同じ国語学校(師範部)を卒業した公学校の教師は日本人なら直接教諭(校長兼任)になるのに対して、台湾人は訓導からはじめ上司(教諭)の命令に従う。本論文では原住民を対象外とする。なお、国語学校の校友は師範部の卒業生のほかに国語部とその他の部が含まれている。本論文で研究した日本人と台湾人の校友は専ら初等教育の教師を育成する師範部の卒業生に限定する。台湾師範教育の沿革に関する研究は注

(2)を参照。

(2) 吳文星『日據時期臺灣師範教育之研究』(台湾師範大學歴史研究所、一九八三年)。謝明如『日治時期臺灣總督府國語學校之研究(一九九五～一九一九)』(台湾師範大學歴史研究所修士論文、二〇〇七年)。

(3) 游鑑明『日據時期臺灣的女子教育』(台湾師範大学、一九八七年)。「日據時期公學校的臺籍女教師」(『日據時期臺灣史國際學術檢討會論文集』、国立台湾大學歴史学系、一九九三年)五五九～六三三頁。新井淑子「植民地台湾における高等女学校出身の女教師の実態と意識——アンケートとインタビュー調査資料——」(日本文部省科学研究費補助金による基盤研究C(二)研究成果報告書、一九九八年)。

(4) 許雪姬編『黃旺成先生日記(一～七)』一九一二～一九一九(台北中央研究院台湾史研究所、国立中正大学、二〇〇八～二〇一〇年)。

(5) 弘谷多喜夫「植民地教育と日本人教師」(『講座日本教育史』第三卷、第一法規出版社、一九八四年)。

(6) 『草屯鎮誌』に洪清江の生年は一八八二年と記載している(草屯鎮誌編纂委員会編『草屯鎮誌』南投草屯鎮公所、一九八六年、九三四～九三五頁)。国語学校学籍簿(国立台北教育大学所蔵)の記録によると明治十一年、すなわち一八八一年となっており、これは『臺灣人士鑑』(台湾新民報社、一九三四年、六七～六八頁)の記述と一致している。ここでは後者の説に従う。

- (7) 臺灣總督府編『臺灣列紳傳』（台湾総督府、一九一六年）二二四頁。
- (8) 臺北師範學校創立三十周年記念祝賀會『臺北師範學校卒業及修了者名簿』『本島人之部』（台北師範學校創立三十周年記念祝賀會出版、一九二六年）七〇頁。
- (9) 一九二〇年代より洪元煌と渥美寛蔵の師弟關係が悪化した。陳文松「從傳統士人到『近代青年』的文化交錯與轉換・『不倒翁』洪元煌與草屯碧山吟社」（『臺灣古典文學研究集刊』創刊号、二〇〇九年六月、三三二―三三三頁）を参照。
- (10) 前掲『臺北師範學校卒業及修了者名簿』『内地人之部』四七頁。
- (11) 前掲『草屯鎮誌』九四三頁。
- (12) 陳文松「校友」から『臺灣青年』へ―臺灣總督府國語學校『校友會雜誌』に見る「青年」像―（『年報 地域文化研究』第九号、二〇〇五年、一三八―一六三頁）。
- (13) 「本島人畢業生及現在生徒臚別」（台湾總督府國語學校校友會『校友會雜誌』第一七号、一九〇五年五月、一六〇―一六一頁）。
- (14) 許佩賢「臺灣近代學校的誕生―日本時代初等教育体系的成立（一八九五―一九一一）」（台湾大學歷史學研究所博士論文、二〇〇一年）一五頁。
- (15) 南投県草屯鎮草屯國民學校『創立七十週年紀念同學錄』（南投草屯國民學校、一九七〇年、三頁）。以下『同學錄』と略す。
- (16) 前掲、許佩賢「臺灣近代學校的誕生―日本時代初等教育体系的成立（一八九五―一九一一）」附録三、三〇八―三一頁。
- (17) 『旧植民地人事総覧 台湾編』（日本図書センター、一九九七年）。
- (18) 前掲『臺北師範學校卒業及修了者名簿』。
- (19) 南投庁出身、一九〇九年三月國語學校師範部乙科を卒業。『校友會雜誌』第二五号（一九〇九年六月）一六四頁。同期の校友に有名な王敏川がいた。
- (20) 南投庁出身、一九〇六年三月國語學校師範部乙科を卒業。『校友會雜誌』第一九号（一九〇六年六月）一一頁。同期の校友に新竹庁出身の有名な魏清徳がいた。洪清江は校友会の終身会員であった。『校友會雜誌』第二〇号（一九〇六年二月）一〇六頁。洪清江は卒業後草鞋墩公學校へ赴任し、その叙任辞令は「臺灣公學校訓導主任ス七級下俸ヲ給ス草鞋墩公學校勤務ヲ命ス 洪清江」と記述されていた。『臺灣教育會雜誌』第五三号（一九〇六年八月）六三頁。
- (21) 一九〇七年入学、『校友會雜誌』第二二号（一九〇六年二月）八七頁。一九一一年三月に卒業、『臺北師範學校卒業及修了者名簿』『本島人之部』一二七頁。
- (22) 洪樵裕口述、卓遵宏、歐素瑛記述『洪樵裕先生訪談録』（台北 国史館、二〇〇一年）五頁。洪樵裕は洪火煉の次男で一九二一年に生まれ、新庄公學校を卒業したあと、東京府立第四中学校、二松学舎、東京高等師範學校に留

学していた。台湾に帰ってから台中州立第一中学校教師になった。戦後、校長、南投県長などを務めていた。しかし、国語学校学籍名簿に洪火煉に関する資料は記述されていなかった。彼が国語学校に入学したかどうかは不明である。

- (23) 『校友會雜誌』第二五号（一九〇九年六月）一六八頁。
(24) 南投庁出身、一九〇三年七月に国語学校師範部乙科を卒業。『校友會雜誌』第一三三号（一九〇三年二月）、八〇頁。同期の校友には新竹庁出身の有名な劉克明と蔡式毅がいた。また、『臺北師範學校畢業及修了者名簿』『本島人之部』一六八頁を参照。
(25) 一九二三年三月に台北師範学校本科を卒業。『臺北師範學校畢業及修了者名簿』『本島人之部』一〇八頁。
(26) 一九〇四年七月に国語学校師範部乙科を卒業。同期の校友には曾拔萃（華）、張承受がいた。『校友會雜誌』第一六号（一九〇四年二月）、七四頁、八〇頁。
(27) 南投庁出身、一九〇五年七月に国語学校師範部乙科を卒業。『校友會雜誌』第一八号（一九〇五年一月）一〇三頁。
(28) 南投庁名間庄出身、一九一四年三月に国語学校師範部乙科を卒業。前掲『臺灣人士鑑』五六、五七頁。
(29) 林倚宗は植民地統治初期に設立された台中師範学校の卒業生。当時の彼に対する評価は次のようである。「君は臺中師範學校の出身者にして多年育英事業に従事し殊に家庭教育に留意し獨特の手腕を發揮した長男林野君は碧峰醫院を開業し次男戊己君は仁和醫院を經營し三男四男共在學中で媳婦、令媛共高女出身の才媛にして令名高し」と言われていた。林燕飛編『新中州の展望』（台中州縮交通信社、一九三五年）三〇六頁。
(30) 一九一七年三月に国語学校師範部乙科卒業。『臺北師範學校畢業及修了者名簿』『本島人之部』八七頁。
(31) 一九一九年三月に国語学校師範部乙科卒業。同前、九四頁。
(32) 一九二一年三月に台北師範学校本科卒業。同前、一〇一頁。同期の校友に有名な謝春木がいた。
(33) 一九一六年三月に国語学校師範部乙科卒業。同前、八四頁。
(34) 一九二六年三月に台北師範学校本科を卒業。同前、一八頁。
(35) 一九二六年三月に台北師範学校本科卒業。同前、一九頁。戦後初期、洪元煌のあとに草屯鎮長を務めた。
(36) 一九二六年三月に台北師範学校本科を卒業。同前、一九頁。
(37) 一九二六年三月に台北師範学校本科を卒業。同前、一九頁。
(38) 一九二六年三月に台北師範学校本科を卒業。同前、一九頁。前掲、林燕飛編『新中州の展望』三〇四頁を参照。
(39) 一九二二年三月修了。同前、一四九頁。「洪克紹書状」『草屯文書』。

(40) 弘谷多喜夫は「そしてこの傾向は昭和一〇年（一九三五年）以降いちだんと強まり、日本人が師範教育を独占した。こうして、師範教育における日本人と『台湾人』の区別の撤廃とは、結局『合法的』な日本人化の強行にほかならなかった」と指摘している。前掲、弘谷多喜夫「植民地教育と日本人教師」、三七〇頁。

(41) 前掲『洪樵榕先生訪談録』二四頁。

(42) 同前。

(43) 植民地統治下における学校教育について、日本人は指導者で、台湾人は協力者であるという構図を指摘している。「台湾の最初の二四年間には、教育上の明確な亀裂 (Clearance) が存在していた。この間に共学は存在しなかった。さらにこの間の教育令はこの亀裂を当然のこととし、日本人が指導者で臺灣人は補助者であるという教育を構築した。」林茂生著、古谷昇・陳燕南訳『日本統治下の台湾の学校教育―開発と文化問題の歴史分析―』（拓殖大学、二〇〇四年）、一五一頁。

(44) 『飛躍百年・薪傳草屯情』草屯國小創校百週年慶特刊（草屯國小創校百週年校慶籌備委員會、二〇〇〇年）一四頁。前掲『草屯鎮誌』六〇三頁。

(45) 洪清江と渥美寛蔵の間に全く対立が存在しないわけではなかった。一九二六年に洪元煌は渥美寛蔵と反目し、庄の政治制度などを批判していた。以下の記述から洪清江と渥美寛蔵の間に矛盾が生じていたことがうかがえる。「会員代表の洪元煌は不完全な自治によって庄長と助役

の間に矛盾は生じた」と述べた。林野は庄民大会を開かなければならないと主張した。遊見龍は人間万事塞翁が馬といった。洪応用は庄議会の役割を述べた。その他の会員は五分間の演説を行った。滑稽なことである。来賓の李春喙は謝辞を述べ、庄の施政はこんなに腐敗しているとは思ってもよらなかったといった。「有心之庄協議員勇退」『臺灣民報』第九二号、一九二六年二月一四日、漢文。

(46) 前掲『臺灣人士鑑』六七、六八頁。

(47) 張深切著、陳芳明・張炎憲など編『張深切全集 卷一、里程碑』（台湾、文経社、一九九八年）二八〇頁。

(48) 『草鞋墩民改奉正朔』（『臺灣日日新報』第五五六四号、一九一五年一月二二日、漢文）。

(49) 一九〇〇年生まれ、草屯公学校卒業、一九二〇年に公立台中中学校卒業。許錫專編『草屯地區開發史資料集』（台湾洪氏家廟・財団法人洪氏子女獎學基金會、一九九八年）二八〇頁。

(50) 草屯公学校卒業。戦争末期に、洪深坑らと一緒に教化委員に任命された。前掲、許錫專編『草屯地區開發史資料集』、一九八頁。

(51) 『青年会其ノ他社会教化的団体調』（台湾総督府内務局文教課、一九二六年三月）一二頁。『全島青年団、処女会、家長会、主婦会調』（台湾総督府内務局、一九二六年度）一五、一六頁。

(52) 前掲、林燕飛編『新中州の展望』二九二頁。

(53) 前掲『草屯鎮誌』三四一頁。

(54) この件については、別稿を期したい。

(55) 歐陽泰著、鄭維中訳『福爾摩沙如何變成臺灣府』（台湾遠流出版公司、二〇〇七年）二二二―二五二頁。

(56) 前掲、許錫專編『草屯地區開發史資料集―洪姓故事篇―』一六六頁。

(57) 一九〇五年の臨時台湾人口調査によると、南投庁の管轄地域では日本人は〇・八%を占めていた。台湾全島で日本人の占める率は一・九%であったが、それと比べると南投地域の日本人の占める率はかなり低いことがわかった。当時二〇の庁の中で、桃園庁（〇・四%）、彰化庁（〇・五%）、塩水港庁（〇・四%）、阿緞庁（〇・五%）より高く、斗六庁と並び下から五番目であった。

『明治三十八年臨時臺灣戸口調査記述報文』（台湾総督府臨時台湾戸口調査部、一九〇八年）六一頁。

(58) 岡本真希子『植民地官僚の政治史―朝鮮・台湾総督府と帝国日本―』（三元社、二〇〇八年）を参照。

〔付記〕 本論文は二〇一〇年二月一日に開催された大阪経済大学日本経済史研究所主催「近代における日本と台湾」において報告したものに大幅に手を加えたものである。報告では洪清江と洪深坑を中心に地域社会での台湾人教師の役割について考察したが、本論文では洪深坑を省略するかわりに、日本人渥美寛蔵に関する内容を加え、台湾総督府国語学校出身の日本人校友と台湾人校友の相違と関係性

について考察した。大阪経済大学経済学部近藤直美先生をはじめ参加者から貴重なコメントをいただいた。ここに記してお礼を申し上げます。

（ちん ぶんしょう・台湾 国立成功大学歴史学系助理教授）

（訳／えん りつ・大阪経済大学経済学部准教授）